國學院大學学術情報リポジトリ

『土佐日記』における海の旅路：グレマス記号論四角形の視点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 土佐日記, 意味の四角形, 海上の旅路 キーワード (En): 作成者: 周, 瑞傑 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000069

『土佐日記』における海の旅路
―グレマス記号論四角形の視点から―

The Journey Across the Sea in "*The Tosa Diary*":
A Perspective from the Semiotic Rectangle of Greimas

周　瑞　傑

キーワード：土佐日記　意味の四角形　海上の旅路
Key Words: *The Tosa Diary*　semiotic rectangle　maritime journey

要旨

本稿はアルジルダス・ジュリアン・グレマス（1917-1992）意味論研究（1992）「意味の四角形」（semiotic rectangle）の理論を用いて『土佐日記』の海上世界の分析を試みたものである。四角形を構築しながら意味そのもの、物語そのもの、あるいは物語を構成する様々な形象への本質的な問いを誘発する力を秘めた〈還元〉と〈構造化〉への試みが詳述されたことによって、意味と物語を横断する文学的、記号論的冒険へと誘いた。又、読者の存在が想定された「文学作品」を素材としながら、原文の海の旅路に関する記事をテキストとして、紀貫之が作り上げた「海上空間」を窺おうとしたものである。近代的な理論のモデルを用い、『土佐日記』を分析することは本稿のもっとも新たな特徴であり、さらに作品としての文学に、その空間の裏に筆者のどんな感情を潜めているのかについて、論究を試みた。

Abstract

This paper employs the theory of the "semiotic rectangle" proposed by Algirdas Julien Greimas (1917-1992) in his semantic research (1992) to depict the maritime world of the work. By constructing the rectangle, the paper explores the inherent questioning power that leads to the "reduction" and "structurization" of meaning itself, the story itself, and various images that constitute the narrative. It invites readers on a literary and semiotic adventure that transcends meaning and story. Additionally, while utilizing the assumed presence of readers as materials for literary works, this paper examines the articles related to Ki no Tsurayuki's sea voyage in the original text, offering insights into the "maritime space" created by the author. The application of modern theoretical models to analyze the "Tosa Diary" is a unique feature of this study, aiming to further investigate the emotions concealed behind the literary work and its spatial context.

はじめに

本稿の研究対象である『土佐日記』は、土佐国から都までの五十五日間に及ぶ旅の記録が記された日記である。日本において現存する日記の中、紀行文に近い要素をもっており、その後の仮名による表現、特に女流文学の発達に大きな影響を与えているので、藤原定家の時以来、高い評判を受けている[(1)]。さらに、『土佐日記』は「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり」と、作者を女性に仮託して、仮名文による新しいジャンルを創始したものとして、画期的な意義をもつ作品である。近年の研究では、従来研究の後に続き、依然としてその「女性仮託」の点から『土佐日記』をめぐって完成させたもの、さらにその作品と漢文学・漢文化に結びつけて論ずるものは多い。が、新たな研究動向としては、歴史的な観点から見た『土佐日記』の災異観、初めて『土佐日記』を英訳したフローラ・ベスト・ハリス（Flora Best Harris、1850-1909）について、その評伝と訳業の成立事情を中心に検討する研究もある[(2)]。

本稿では、主として『土佐日記』内部の世界に目を向けてみたい。特に本稿が注目するのは、『土佐日記』に描かれる海の旅路である。作品中において、海上の旅路を中心に記された節は数多く、具体的に言うと、到着地の停泊日を除いて、承平四年の十二月廿七日から、大津から浦戸、そして大湊へ、大湊から奈半へ、奈半から室津へ、鳴門の土佐泊へ、四国を去り、和泉の灘へ、和泉の灘から住吉へ、難波、山崎と桂川、最後に承和五年二月十六日に帰京する約十節以上の内容は海で舟に乗る旅の場面である。全五十五日間に約三分の一を占めている海の旅路には、波音、月と雲などの美景もあれば、当然、悪天候、海賊、故郷と亡女への思いもある。本稿はそれらの海上の遭遇を出発点とし、言語学者のアルジルダス・ジュリアン・グレマス（1917-1992）意味論研究（1992）「意味の四角形」（semiotic rectangle）[(3)]という論理的図式を用いながら、作者にとって海上はいか

---

(1)　鈴木登美．「女流日記文学」の構築―ジャンル・ジエンダ・文学史記述―．『文学』，1991年。
(2)　例えば、大野ロベルト．英語圏における『土佐日記』受容史の概略戦前編：アストンとハリスを中心に．異文化．論文編：Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication, Hosei University (23) 153-185, 2022年；小林健彦．「土佐日記」に見る災異観：年中行事と習俗．新潟産業大学経済学部紀要，2021年；小倉慈司．かな日記と『土佐日記』：女房が日記を記したのはいつからか．国立歴史民俗博物館編，2021年などがある。
(3)　グレマス．アルジダス・ジュリアン．赤羽研三訳『意味について』．水声社，1992年。

なる空間なのか、また、作者一行にとって、それらの遭遇は作品世界でどのような機能を発揮しているのかについて考察を試みる。

一、海上の世界

本章は、海上の旅路が、『土佐日記』においてどのような空間として捉えられているのか、また、作者一行にとって、このような空間においての心情を考察したい。本章で扱われる底本は小学館『新編日本古典文学全集13・土佐日記』による。

（一）朦朧の空間

①曇れる雲なくなりて暁月夜いとおもしろければ、舟を出して漕ぎ行く。**このあひだに雲のうへも海の底も同じ如くになむありける**。うべも昔のをのこは「**棹は穿つ波の上の月を。舟は襲ふ海のうちの空を**」とはいひけむ。（十七日）

②猶同じ所にあり。海あらければ舟いださず。この泊遠く見れども近く見れどもいとおもしろし。かゝれども苦しければ何事もおもほえず。男どちは心やりにやあらむ、からうたなどいふべし。舟もいださでいたづらなればある人の詠める、「**いそぶりの寄する磯には年月をいつとも分かぬ雪のみぞふる**」この歌は常にせぬ人のごとなり。（十八日）

③海のうへ昨日の如く風浪見えず。黒崎の松原を經て行く。**所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに、貝のいろは蘇枋にて五色に今ひといろぞ足らぬ**。この間に今日は箱の浦といふ所より綱手ひきて行く。かく行くあひだにある人の詠める歌、「**玉くしげ箱のうらなみたゝぬ日は海をかゞみとたれか見ざらむ**」。（二月朔日）

①は一月十七日の記事であり、この日に雲がなくなって、舟を出して漕いで行っていた。この間に、下線部分によると、雲の上も海の底も同じようであった。海上には天と陸のような明らかな区別がないので、夜行の海に空間の分割は不明である。月は波に落ちたように照らして、棹は天上に月を貫いて行く。この感覚の欠如が明らかになり、朦朧とする透明な球体の空間に、作者一行は漕ぎ出した。

②は一月十八日の記事であり、出港するも、天候不良により、再度、室津に寄港した。舟も出港できない、暇であるので、ある人が詠んだ歌によって、荒波の打ち寄せる磯には、年月をどのときとも区別せず雪だけが降る。空間の朦朧にしたがって、さらに年月を区別せず雪が降るという、時間と季節の混沌である。陸上においては、春夏秋冬の転換によって景色はそれぞれであり、花鳥風月別々の趣味が味わえる。その一方、海の景色はどの季節にも止まない波、風、雷あるいは雪であり、時間の推移の感覚も薄い。大海原で自分の居場所を正確に把握するのは、簡単なことではない。近代的な機器がなければ、極めて困難な作業である。そんな環境の中で何日間も海上に漂流していると、感覚の欠如はいっそう朦朧になる。

③は①と同じような場面で、風も吹かず波も立たない。黒崎の松原を過ぎて行く。土地の名は黒く、松の色は青く、磯の波は雪のように白い、貝の色は蘇方、五色にあと一色だけ足りない。さらに、箱の浦の波の立たない日は、誰がいったい海を鏡のようだと見ないことがあろうかを詠んだ人もいる。好天候で、海は鏡のような状態になり、依然として空間の混同を表している。

（二）未知の恐怖

続いて、この朦朧、混沌の海上旅路において、作者一行の心境はどうなるのかを検討していきたい。

> ④さて十日あまりなれば月おもしろし。船に乗り始めし日より船には紅こくよききぬ着ず。**それは海の神に怖ぢてといひて、何の蘆蔭にことづけてほやのつまのいずしすしあはびをぞ心にもあらぬはぎにあげて見せける**。（十三日）
>
> ⑤雨風ふかず。海賊は夜ありきせざなりと聞きて、夜中ばかりに船を出して阿波のみとを渡る。夜中なれば西ひんがしも見えず、**男女辛く神佛を祈りてこのみとを渡りぬ**。寅卯の時ばかりに、ぬ島といふ所を過ぎてたな川といふ所を渡る。からく急ぎて和泉の灘といふ所に至りぬ。**今日海に浪に似たる物なし。神佛の惠蒙ぶれるに似たり**。（三十日）

④も⑤も暗闇に包まれる空間の夜の海である。ここで作者が「海の神」、「海賊」

を言及した。というと、この感覚のうすい空間において、海へ畏敬の念を抱き、大荒れと海賊を恐れる心情である。④には、船中の女たちが紅の濃い、いい着物を着ていなかったのは、海の神に魅入られるのを恐れるというわけで、忌むことはできないからである。さらに、海賊は出ない夜中なので、⑤に西も東もわからない日時で男も女も一心に神仏に祈って、この海峡を渡ったということは、神仏の力を借りて未知の空間に未知の恐怖が来ないように祈っていたのである。つまり、海上の旅路には天気も人々の心境も晴れる時は少なく、常に自然と悪人の襲来を恐れ、不安と憂慮の状態でいった。それは、特に古代の人々による航海術と商業活動の未発達で、天災事変に対抗できない根性であり、また、未知の環境におかれて、都との生活に比べてずれが生まれた自然の恐怖心理である。

二、グレマス記号論四角形からみた海の旅路

作品の海上世界を検討した上に、ここでグレマス記号論四角形の理論を用いながら、海の旅路におけるいくつか衝突する項目を挙げて分析したい。

（一）理論の概要

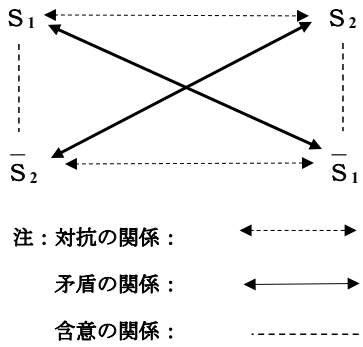
言語学者のアルジルダス・ジュリアン・グレマス（1917-1992）は、意味論研究（1992）において、特定のテクストのある項目に注目すれば、そのテクストに明示されていない項目が何であるかを予測発見することを可能にする「意味の四角形」（semiotic rectangle）という論理的図式（図一）を考案した。

まずある意味体系Sにおいて、ある事柄（例えば事柄〔S_1〕）の記号的認知（正確には意味論的認知）は、それと反対の関係にあるもの（前記の例では例えば〔S_2〕）、それに含意される関係にあるもの（この例では〔$\overline{S}_2$〕）、およびそれと矛盾の関係にあるもの（この例では〔$\overline{S}_1$〕）の四者を立脚点にする。通常、「グレマスの四角形説」といわれる。

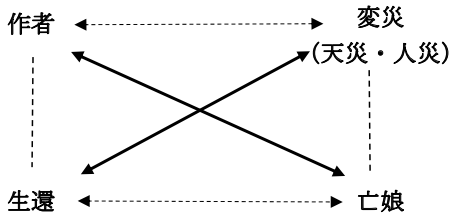
（二）『土佐日記』による四角形の構築

このモデルを流用して、作者一行（S_1）というサブジェクトから3つの項目を導出してみることにしよう（図二）。

図一[4]



図二



作者一行を主体（S_1）とすれば、それに対抗する関係であるものは当然海上の旅路にずっと案じている変災（S_2）である。この変災はただ単に自然の天災を指すのでなく、さらに詳しく説明すれば、『土佐日記』における荒れ海、嵐また海賊である。上の「未知の恐怖」一節にも論じていたように、作者一行は海の神に祈り、言い換えればこれらの変災は彼一行にとってもっとも直接な脅威である。そして、変災に矛盾しているのは無事で都に帰るということ（$\overline{S}_2$）である。これと作者一行（S_1）の含意関係にしてみれば、それは主体が神の力を媒介にして祈ることになる。最後に、$\overline{S}_1$の位置を代表しているのは作者が思い寄せている亡娘。原文の二十七日に記しされた内容によって、都で生まれた女の子が、任国で急に亡くなったので、本当に悲しく（娘が）恋しい思いがする[5]。本稿で初めてここに

(4)　Martin, B. and Ringham, F. (eds.) (2000), Dictionary of semiotics, London: Cassell.

(5)　「大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに京にて生れたりし女子（子イ無）こゝにて俄にうせにしかば、この頃の出立いそぎを見れど何事もえいはず。京へ歸るに女子のなき

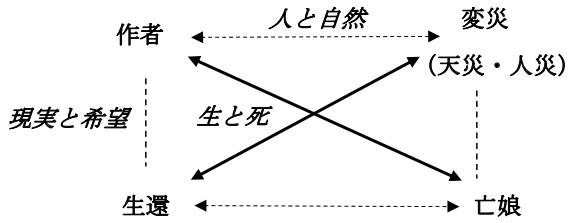
亡娘を言及するが、実際にはこの苦痛の思いは『土佐日記』を貫いている。帰還の時に近づくほど、この心情はいっそう激しくなる。ここで生還の対立面には亡娘で、生と死の距離を跨っている。こういうモデルを全体的に見ると、上述のように詳細な分析のほかに、また作者と亡娘の矛盾と、変災と生還の二つの矛盾もある。したがって、全篇を概観的な枠組みで構築し、原作で簡単に見つけることはできない二つの対抗関係、二つの矛盾関係または二つの含意関係が明瞭になった。

三、三つの「対立」

前のモデルの細部を検討した以上、ここで構築された四角形（図二）にさらに三つの「対立」がある。主体（S_1）を原点から発散すれば、そこに至るところは三つ（S_1—$\overline{S}_1$；S_1—S_2；S_1—$\overline{S}_2$）、それぞれに一つの対立関係を代表している。まずはS_1—$\overline{S}_1$（作者と亡娘）の対立関係をみると、そこに象徴しているのは生と死の対立である。続いてはS_1—S_2、つまり作者と変災、人と自然、あるいは災禍との対立関係である。最後はS_1—$\overline{S}_2$、作者と生還、言い換えると神の力を借りて現実と理想の対立である。そこで新たな三つの対立を四角形を入れると、図三になる。

グレマスは、記号論四角形を通して文学研究を様式化のステップに従って解釈した。最初にシンボルになる要素を確立し、次に四角形モデルに入れてそれぞれの関係を確立し、反対、矛盾との関係で意味を引き出し、その後、作品の深い意

図三



のみぞ悲しび戀ふる。ある人々もえ堪へず…」（二十七日）という。

味を解釈する。このように、『土佐日記』をいくつかのモジュールに分けられ、まさに解剖された体のようなフレームを構築した。作品に潜んでいる三つの対立関係は剥離され、そこに作品背後の深意も探り出した。

まとめ

本稿は、時間と時代を超える作品と記号学の理論を結びつけて、『土佐日記』における海上の旅路の世界とその背後に隠された深意を検討してきた。

序章は三つの問題をめぐって、まず文脈を整理し、作者にとって海は朦朧なので、そこに時間の推移と空間の分割も不明である。したがって、人々の感覚は欠如し、恐怖感が生まれた。その原因も、こういう恐怖心理は時代技術の制限で、変災に抵抗できない無力感であり、または都との生活に比べてずれが生まれた自然の恐怖心理である。

また、第二章は本稿の主体部分であり、最初にグレマスによる理論の概要を解釈し、そこにはじめて四角形を用いて『土佐日記』の四つの対応要素を試みて描き出した。作者自身はサブジェクトの位置に占め、それに応じて変災、生還と死んでいた愛娘の要素をそれぞれ相応の項目に置かれた。作者と変災の対立、愛娘との矛盾；生還と死亡した娘の対抗、または変災との矛盾、四つの対応関係を明らかにしてきた。最後に、構築されたモデルに戻り、作者の主体を出発点として発散された三つの対立関係も指摘した。この三つの対立は『土佐日記』に潜める作品の主旨と思って、作品の深意を代表している。作者と変災の対立に象徴しているのは人と自然の対立、その天災事変に対して人の無力感である。それに、現実と理想の対立は作者と生還の対立を象徴し、一行の人々は神の力を通しての目標である。最後に、作者と愛娘の対立に象徴しているのは永遠なる話題の生と死の対立である。紀貫之は赴任の間、任地である土佐国で愛娘が突然死んでしまったので、気慰みともいえる旅路において、娘の姿をずっと思い寄せている。この生と死の遠隔は、『土佐日記』に含めているもっとも強烈な感情であり、作品特有な諧謔表現（ジョーク、駄洒落などといったユーモア）を多く用いている自嘲的な表現が多い原因でもある。

本稿は、『土佐日記』と最近勉強中の記号学の理論を結合した試作である。大きな成果を挙げている過去の研究に比べ、些か手薄であり、十分に意味づけされて

いるとは言い難い。しかし、こういう近代的な理論のモデルを用いながら、『土佐日記』を分析してみることは本稿のもっとも新しい特徴であり、もしこういう形で作品に関する研究に何か新たな方向を提供できるなら幸いである。近代文学を研究している筆者にとって、テキストの新旧をとわず、解釈する方法は大同小異と考えられる。

参考文献

紀貫之作．菊池靖彦／伊牟田経久／木村正中訳『新編日本古典文学全集13・土佐日記』．小学館，1995年。

グレマス．アルジダス・ジュリアン．赤羽研三訳『意味について』水声社，1992年。

西野入篤男．『土佐日記』の海―都志向との関わりについて―．文化継承学論集，2006年。

大橋昭一．「組織記号論」と「批判的記号論」：最近における記号論拡大の２つの方向．關西大學商學論集，2018年。

池田光穂．物神化する文化：文化遺産のグローバルな流通について――意味の四角形（グレマス）について．三田社会学，2000年。

大橋昭一．記号論に立脚したツーリズム研究の特性について―ツーリズム研究の一層の発展のために．観光学評論，2017年。

Martin, B. and Ringham, F. (eds.) (2000), Dictionary of semiotics, London: Cassell.